
春は別れの季節なら秋は出会いの季節

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春は別れの季節なら秋は出会いの季節

【Nコード】

N1548Y

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

ある日、蘭が父、毛利小五郎と自分の夕御飯の材料を買いに米花商店街に行き、そこで出会った工藤新一と仲良くなる。そして、出会った日の次の日に蘭は新一のいる帝丹中学に転校するという。これが、新一と蘭の運命の出会いなのである。新蘭パレルです。新志派さんは遠慮しておいたほうがいいと思います。また、にじファンに入ったばかりなので駄目文ばかりです。。。ご了承ください。

出会い（前書き）

新蘭です？出会いなので結構「」よりも文章を多くしました！

出会い

だんだんと寒くなっていくこの秋の季節。そんな季節の中、今日は秋とは思えないほどの寒さ。

おまけに北風が音を立てながら米花町を覆っていた。その米花町の中で有名な米花商店街ではいつものように人でいっぱいだった。その中には、中学生の少女が人をかき分けながらスーパーへと向かっていた。

スーパーにたどり着き、中へ入ると暖かい空気が少女の体を温めた。少女は無事に中に入れたことにホッとして買い求めている物のコーナーへと向かった。

「えっと…牛肉にジャガイモに人参に玉ねぎに…」

少女は買い物が慣れているようで素早く安全性を見ながら野菜や肉をかごの中に入れた。そして、玉ねぎのコーナーに行つて、よさそうなジャガイモに手を伸ばそうとしたときに誰かの手とぶつかった。

「「あ」」

ぶつかり合った二人は同時に声を上げる。少女はすぐに手を引いてそのぶつかってしまった人にジャガイモを渡した。しかし、その人はいいいと言つてきかないのだ。

「あ、でも…」

「いいって…」

「で、ですけど、私、平気ですから！」

「おれも平気だった！」

「でも…と、とにかく、私違うジャガイモを買いますからそのジャガイモ、買ってくださいね！」

2人はそんなことで小さな口論となっていた。すると、そのとりあひになつたジャガイモを誰かがとっていつてしまった。

「「あ」」

またしても同時に行った。その言葉で2人は笑いあった。少女は笑い終わると一緒に笑いあった少年に自己紹介をした。

「私、毛利蘭っていうの！よろしくね！」

「おれ、工藤新一っていうだ。一応、中学生探偵。」

蘭という少女は新一という少年とその後、公園に行って話などをしていた。2人は気があって一緒にいるととても楽しそうだった。

「なあ、どこの中学だよ。」

「私は、明日から帝丹中学校っていうところに転校するんだ！」

蘭の言葉に新一は少し驚いたような顔をした。

「そりゃ、偶然だぜ！俺、帝丹中学校に通ってたぜ？」

蘭も新一の言葉に驚いた。そして、また二人で笑いあった。

これが、蘭と新一の運命の出会いだったことは誰も知らなかった。

出会い（後書き）

えっと、誤字脱字があったら教えてください…

仲良し！（前書き）

今回は蘭が帝丹中学に転校する話です！！

仲良し！

おれの名前は工藤新一。一応中学生探偵として今に至るが…昨日、おれは母さんに頼まれて米花商店街のスーパーでカレーの材料のジヤガイモを買ってこいという命令があつたのでジヤガイモに手を伸ばすと誰かとぶつかった。ぶつかった人は女の子で俺と同じ中学生だった。名前は毛利蘭。毛利さんは今日、おれの通っている帝丹中学に転校してくるらしい。彼女、結構かわいかったななんてたまに思い出す。そ、そんなことより、ホームズ読もうつと！

ガラッ

教室のドアが勢い良く開いた。おれはま、まさかと思うとそこに立っていたのは先生だった。おれはホームズを読むことができなかった…。

「あー、今日は転校生が来るぞ！女子だ！あー入れ！」

この先生、「あー」しかいわねーじゃねーか！

そんな突っ込みを入れながら彼女が入ってくるのを待っていた。そして、彼女が教団の前まで来るとさわやかな笑顔で自己紹介をしていた。おれはそんな姿になんとなく顔を赤くしていたと思う。なぜだかわからないけど、胸が熱くなっていた。

仲良し！（後書き）

ちょっと短いですが、誤字脱字があったら押してください…

仲良くしたいからって…（前書き）

蘭目線です!!

仲良くしたいからって…

今日、帝丹中学に転校した私。

あ、毛利蘭です！昨日、私は今人気の中学生探偵に出会った。

工藤新一っていうみたい。私、殺人とかっていうの怖いから嫌い。でも、工藤君ってわたし、1人の

男の子っていう感じで見てるの。別に、すきとかっていうんじゃないくて、友達になってみたいなって！

そして、私はなぜか工藤君の隣の席となった。

工藤君はいつも授業中はねているくせに先生の質問にはきちんと答えられているの。

きちんと答えたらすぐに寝なおして…なんか赤ちゃんみたいだな…なんてこと考えちゃう…

休み時間になると、工藤君の机の周りには女子で群がっていた。私は女子の大群から避けて、なんとなく廊下に向かった。

私は廊下が好きだった。廊下はなんだか落ち着くような気がして。すると、どこからか、たぶん三年の先輩が私に話しかけてきた。

「ねえねえ、君って転校生？」

「はい！毛利蘭って言いますけど…」

「よかったら、今日一緒に帰らない？」

「あ、でも、時間が合わないかと思えます。」

私はちよつとこの先輩苦手…。はじめてあつたけど、ちゃらいというか…何というか…

「大丈夫！おれ、君と一緒に帰りたいから！」

う…っこれ以上でしゃばるといけないような…

私は少し嫌だったけど仕方なくうなづこうと思った。その時、

「先輩、申し訳ないけど、今日、おれとこいつ一緒に帰るんです。」

女子の大群にいたはずの工藤君が私の目の前に立っていた。

「く、工藤君…?」

「く、工藤じゃねーか！まさか、お前ら付き合ってるんじゃないだろうな!？」

え…?!私と工藤君が?そんなわけないよ!!

「ち、ちがいま」

「そうです!」

は…?工藤君…今なんて…ちょっと待って!私工藤君と付き合っていないよ!!

「工藤、あんまり出しゃばると後で痛い目にあうぞ!」

先輩はそう言い残すと走って教室に向かっていった。

私はホッとしているようなドキドキしているような微妙な感情にあふれていた。

「あ、あの。ありがとう!あとさ…何で付き合ってるって言ったの?」

思いきって聞いてみる。わたしなんかとつきあっているってしたらあかつぱじかくはず。

なのに彼は普通に平然とした顔で言っていた。すごい…

「そうでもいわねーと、あの先輩はしつこいんだよ。」

「へえーっ!でも、うわさになっちゃうよ。わたしなんかとつきあっているなんてうわさ、最悪じゃない?」

「はあ?そうか?」

かれに意外な返事が私にはまったく意味が理解できなかった。

「なんでですか?」

「それこそなんだよ」

「意味が…わからないんですけど…」

「おれも…」

そこまで言つと二人は同時に笑いあつた。なぜだかわからにけど、なんか笑いたくなった。

「工藤君、あのさ、友達として接していいかな?」

「ああ、もちろん!あ、そうだ。おれのことは新一って言っている

から。おれはお前のこと蘭って呼ぶ。いいな？」

「うん！よろしくね、新一！」

「よろしくな。蘭！」

私は工藤君、ううん、「新一」という言葉を言えてなんだか嬉しくなった。

なぜだろう？わからないけど、嬉しくなっていた。そんなこんなで放課後に時間を運んで行った。

私はかばんに勉強道具を入れていると、気が強そうな女の子が1人とその周りに家来のようにいる女子が数人私のもとへやってきた。

私は何かあったのだろうかと思いついたの？と言ってみた。

「あなたの話があるの。早く来て！あ、荷物持って行ってね！」

私はかばんを持って、裏庭へと連れて行かれた。

「ねえ、何か話があるの？」

にこやかに行ってみると、なんかその気が強そうな女子の顔が険しくなった。

「私の名前は高田佐恵。単刀直入に言うけど、工藤君とずいぶん親しいわね。」

「ああ、実は昨日米花商店街であつて、仲良くなったの。」

「ふうん…あなたは工藤君のことが好き？」

「えっと…新一のことはただのとこだちって思ってるけど。」

私は少し笑顔を作りながら言ってみる。

「…新一っていうのね。」

「新一がそう呼んでくれた。」

「そう…じゃあ、好きでもなんでもないわけね。」

「友達だよ！」

「そう。なら、工藤君といちゃつかないでくれるかしら？」

「いちゃつく？どこが？」

「自分の胸にでも聞きなさい。それじゃあね。」

高田さんはそれだけ言つと私のもとから仲間を連れていなくなつていった。

私は少し怖かったけど、半分は何がどうなっているのかわからなかった。

私は、新一と畑田の友達名だけなのに…みんな誤解をする。どうしてだろう？

仲良くしたいからって…（後書き）

佐恵ちゃん登場！誤字脱字があつたら教えてください！！

監視の目（前書き）

新一と蘭が仲いいところを…？

監視の目

蘭は昨日の一件があったにもかかわらず、今日も新一と仲良く喋っていた。新一も蘭としゃべっていると楽しそうに笑っていた。

「新一の好きな食べ物って何？」

「レモンパイ！蘭は？」

「私は…何でも好きだよ！あ、でも、特にケーキとか？」

そんな他愛のない話をしながら、登校している二人。どこから見ても普通のカップルに見えるだろう。

「新一、新一って好きな人いないわけ？」

蘭は冗談交じりに言う。

新一はその蘭の問いに少し間が入った。

「……いねーよ。」

「あれ？今、間が入らなかった？」

「は、入ってねーよ！」

「そうかしら？」

蘭はそういって、学校の門をくぐると、友達の園子のもとへ行ってしまった。

新一はその様子に目を奪われており、門の横にある、「帝丹中学校」とかいてある表札に勢いよくぶつかった。

「つてえ…」

「何ぶつかってんのよ、平成のホームズになりたくて仕方ないおつちよこちよいの探偵さん？」

「セリフ長いって…」

「うるさいわね。」

新一がぶつかったところを偶然目撃した宮野志保が新一の目の前に立っていた。

「工藤君って、蘭さんが好きなのね。」

「はあ？んなわけねーよ。」

「私にはわかるわ。」

志保はそういうとその場を立ち去って行った。新一は志保の言動にあっけにとられていた。

「ンだよ、あいつ……」

やがて、こんなにぎやかな朝はもつとにぎやかになる、昼へと時間は流れて行った。

時間とは早いものだ。あんなに寒い朝だったのが今日は特別、昼間は熱くなつていったのだった。

そして、生徒たちは女子は女子同士、檀氏は男子同士で昼ご飯を食べ始める時間である。

その中に、男女混合で正確には女子三人男子一人という珍しいグループがあつた。

メンバーの名前は園子、志保、蘭そして新一である。

「新一君って蘭のこと好きなわけ!？」

いきなり園子が新一に向かって言いだす。それと同時に新一は飲んでいた麦茶をその場に吐き出した。

「げほつげほつ!」

「汚いわね。ちゃんとふいておいてよ。」

「は、はひ……」

新一はうまく言葉がしゃべれないのか、日本語が日本語になつていない。

「大丈夫?」

蘭だけが新一を心配する。そんな蘭の優しさ強さはすごいと思う。

(作者の私でも)

その時だった。

蘭が新一の背中をさすっていた時、蘭は変な目線を感じた。

ほかの人にはわからなかったが、蘭だけは感じた。

睨みつけられているような、怖い目線。つまり、監視されているよ

うな視線。

そのころ、その監視の視線を投げていた、高田佐恵は思い切り蘭を睨みつけていた。

「何なのよ・・・！あの娘！」

悔しがるような声を上げる佐恵は悪魔のようだった。

そして、仲間たちがざわつき始める。小さな声だったが、佐恵には聞こえた。

「工藤君って毛利さんが好きなんじゃない？」

「そうよそうよ、リーダーのやってることって意味ないんじゃない？」

「ありうる！」

そんな声を聞いた佐恵は黙って聞いているはずなかった。

「なんですって！！！！？もう一回言ってみなさい！」

佐恵は怒り狂った般若のような顔をして仲間を睨みつける。

仲間はその顔に驚いて申し訳ございませんと謝った。佐恵はまだ機嫌が悪いらしく、また、蘭を睨みつけていた。

―いつでもあなたを監視しているよお…いつでもあなたをね…―
そんな思いを込めて佐恵はずっと蘭を睨みつけていた。

監視の目（後書き）

鈴「いやぁ…佐恵ちゃん怖いです…」

蘭「うん…これからどうしよう…私、なんかしたかなあ？」

鈴「あ、いやだから…・・・しんい」

蘭「あ！…わかったかも！…あの先輩に声をかけられたから…！！！」

鈴「（ちよつと違う…いや、全然違うな。）誤字脱字があったら教えてください！」

また、変な文章がありましたらお知らせください！」

悪魔の使者（前書き）

今回は佐恵の初恋です！

新一のことを思う佐恵は最初は可愛いけど、だんだんと悪に身を任せていく…

悪魔の使者

私の名前は高田佐恵。読者の皆さんには言ってません出したけど、私、高田財閥の超お嬢様なの。ま、鈴木さんには負けるけど。

そして、私に初恋が訪れた。お相手は工藤新一。今、売り出し中の中学生探偵なの。

完璧すぎる私にふさわしいのは彼のみ。私は可愛いし、お金も持っているし、権力もある。

工藤君にはふさわしいわ。私にだって彼はふさわしい。私と彼はこうなる運命。そうでしょう？

私は中学一年になって工藤君と同じクラスになった。そして、席も近い！とはいっても、かれの隣の席は空白。余ったから、工藤君の隣に置いたそうよ。次の転校生さんはラッキーね。

なーんてね。そんなことさせないわ。私こそが工藤君にふさわしいお方なの。ほかの女には釣り合わないわ！

それにしても…なんなの？宮野さんって。工藤君になんか嫌味いつているみたいなんだけどお！

「ちよつとちよつと、宮野さん、何を話してらっしゃるのかしら？私も混ぜてくださる？」

「ええ、もちろんと言いたところだけど、この男を精神的に抹殺する方法を教えてくださいわいわよ？」

「へ？」

つ、ついつい恥ずかしい声を…

「な、何を…」

「あら、いやなわけ？なら、来ないでくれるかしら。私、鈴木さんみたいな気取らない人が好きよ。」

宮野さんはそういうとその場からいなくなった。チャンス！工藤君と二人きり！

工藤君、何か赤い顔してるう？って…してないし。

こんな美女がすぐそばにいるって言つのに…！
まあいいわ。

「工藤君って好きな人いる？」

「いねー。」

「なら、私のこと好きになつて！」

「はあ？ いやだね。」

「なんで？ こんな美人がいるのよ？」

「お前は表は金の林檎だけど中身は腐った林檎なんだよ。」

「ちよつと、それどういう意味よ！！」

「そのまんま」

工藤君もそれだけ言つと私の目の前からいなくなった。

私はただ、その場に立っていただけだった。

そう…このときからだ…このときから、工藤君しか頭に入らなかったの。

工藤君と幸せになるって決めたの…

工藤君に言い寄る女はすべて排除してきた…

私はこのときから悪魔の使者として女子たちの幸せを奪っていった…

そして今に至る。

今も毛利さんの行動を観察中。何かあの子むかつくのよ。いちいち

工藤君としゃべって…

私の工藤君なのに…

どうして…？ どうしてそんなこと…

—私の好きな人がとられちゃう…どうしよう…—

え？ 今、なんて？ 「どうしよう？」 何で焦ってるのよ。私…もしかして、もう失恋しちゃってるわけ？

んなわけないよね？ 私と工藤君は…いつか結ばれる運命。信じなくてはいけないわね…

おほほほほほ！

悪魔の使者（後書き）

佐恵ちゃん最初は結構ナルシストだったんですね…（今よりはまし）でも、今、佐恵ちゃん焦りを感じていますよぉ～！蘭、がんばってえ～～！

守るから（前書き）

園子、志保視点です。

友情が感じられるかしら？

守るから

私の名前は鈴木園子。一応、鈴木財閥の娘だけど、そんなんで偉そうにしてるわけじゃないの。

私が一番嫌いなタイプは、新一君にべたばれの高田さん。一応私と同じ財閥なんだけど、小さいわね。

規模が小さいの。まいつか。

「蘭、もしかして、高田さんに変なことされてない!？」

「なんで？」

「しつてる？新一君と仲良くした奴は高田さんによつて排除されるらしいのよ！その証拠に、先月蘭が来る前に転校してきた子が新一君に惚れちゃって、告白して次の日に転校しちゃったのよお！そして、転校させた本人があの高田佐恵つてわけ！気を付けなよ！」

「なんで？」

あーっもう!!

「あなた新一君のこと好きじゃないの!？」

「はあ？好きなわけないじゃない。ただの友達よ。友達。」

蘭…本当にそうなの？

蘭、本当に新一君のこと好きじゃないの？

私は、蘭の気持ちを知りたいよ？蘭…教えて…蘭…っ！

「園子、授業に遅れちゃうよ？」

そんなかわいらしい顔して意地っ張りなんだから。

あんだ、モテていること知らないのね…

男子はあなたにハートを奪われているわよ？

もちろん新一君もきつと。

蘭、あなたは自信持っていいのよ？

私の名前は宮野志保。最近転校してきた蘭さんと友達。

蘭さんはやさしい穏やかな心の持ち主で、私の永遠の憧れになりそうだわ。

あの工藤君のハートを奪いそうなあなたの美しい瞳は私も吸い込まれそうね。

「蘭さん、そろそろ意地を張らずにいたら？」

「なんで？」

「あなた、工藤君のこと好きでしょ？」

「ううん！ただの友達だって！」

「そうかしら？」

「園子と同じこと言うのね……。」

あら、鈴木さんも同じこと言ったのね。

考えていることが同じなんて笑っちゃうわ。

蘭さん、意地を張っていたら、高田さんの魔の手によって侵略されてしまうわ。あなたのきれいな潤っている純粋な心を悪に侵略されてはいけないわ。

あなたは、外見も中身もGolden Appleだもの。

腐った林檎に侵略されてはいけないわ。

蘭、私は

蘭さん、私は

あの悪魔から

あの腐った林檎から

あなたを守ってみせるよ。

守るから（後書き）

これ、一回やって見たかったんです。

園子と志保が蘭のために何かするっていう…

なんというか、友情というか・・・？

助けて・・・（前書き）

蘭視点です！

蘭が…っ！

助けて・・・

昼間に比べて静かになっていく教室。今はもう、生徒たちにはすつきりした気持ちになっているだろう。

でも、私は違かった。

そわそわしていて、怖い恐怖におびえているような感覚だった。

そう…もうすぐ裏庭へと行かなければならなかったのだ。高田さんに呼び出されてしまった。

高田さんは何かと私に目をつける。わからないけど、私のことを嫌っている。

園子が気をつけてといった意味がなんとなくわかったような気がした。

志保もそんなことを言っていた。私だってわかっている。気をつけたほうがいいことはわかってるけど…

でもどうしても、あの性格が本当の高田さんとは思えないような気がする。

もっと素敵な人だと思ってる。今でも素敵だけど、きれいだけど、でも…でも…あれが高田さんとは思えないんだ。なぜだろう？

そんな疑問が浮かんでくる。

でもやはり、裏庭に行く勇氣は出なかった。

怖くて何度も何度もこのまま帰ってしまおうかと考えた。でも、呼び出しているんだから、行かなくてはいけない。

私は裏庭の大きな銀杏の木の下で待っていた。

肌寒いこの季節は銀杏の葉っぱが悲しく揺れているように思えた。

「あら、もう来ていたの？早いね。」

偉そうな声と言葉が私の胸に突き刺さる。振り返ると私がおびえている高田さんが腕を組んで私の目の前にいた。

「あ…高田…さん」

「あら、ずいぶんと驚きの様子ですこと。」

「そ、そんなことないよ！それで、何？話って！」

明るく行こうと思つてちよつと高い声を出した。

「お金。」

「え…？」

「お金をちょうだい。」

「で、でも、高田さんの家って…財閥じゃあ？」

「ええそうよ。もっとほしいの。ほら、ちょうだいよ。」

「今、持つてるわけないじゃん…」

「あ、そう。毎日一万円で我慢してあげる。」

高田さんは鼻で笑いながら私に話しかける。

その笑いはまるで悪魔に取り付かれたような感じだった。

「一万円…」

そんなお金出せない…ただでさえ、食費に困っているっていうのに…

「あ、そう…あなたのお父さんがどうなってもいいわけね。」

「どういうこと！？」

「あなた、最近お父さんが帰ってこないはずよ。」

「どうせ、飲みにも行つてるんでしょ？」

「違うわよ、私の家に監禁してあるのよ。」

え…？お父さんが…監禁！？

「どう…して？」

「あたりまえじゃない。あなたがいる限り人々は全員不幸になるのよ！」

私が…いたら…みんなが不幸に…？

「あなたは何のために生きてるのよ。」

「私…は…」

誰のために生きてるの…？

誰かに愛されているの…？

いいえ。愛されているはずよ。お父さんやお母さんにも、園子にも志保にも。

「私は、家族のため、友達のためよ！」

「ふうん…あなた。何にも知らないのね。あなたのお母さんはもはやあなたのことなんて愛してないわよ！！もちろん、鈴木さんも宮野さんもね！！！！！！」

え…？何で？私は…愛されているはず…

「あなたの自己満足なだけよ。」

「で、でも…」

「まだ言うの？」

いきなり冷たい口調で言う高田さん。私はその場に崩れ落ちた。そして目から液体が私の頬をつたっていく…。

「高田…さん？」

「あなたはだれにも愛されちゃいないの！だから、私のためだけに生きて行きなさい？」

「え…？」

「お金を渡してくれば、生きていく道を教えてあげる。そして、お父さんを助けてあげるわ。明日、必ず持つてきなさい。いいわね？」

「…」

「いいわね？」

「…わかった…そしたら…お父さんは…？」

「もちろんはなしてあげるわ。」

「わかった…」

高田さんは私の返事を聞いてそのまま霧のように消えていった。

もう私には立つ気力も残っていなかった。ずっと泣き続けながらその場にしゃがんでいた。

これからどうしたらいいのか、お父さんは無事だろうかそんな思いがこみ上げてくる。

私のことはいいから…お父さんだけは…お父さんだけは助けてあげて…

お父さん…お父さん…お父さん…っ！

新……助けて……助けてよ……っ！！

カシヤツ

カメラのシャッター音がどこかで聞こえたような気がした。

振り返っても横を見てもその音の主はいなかった。

きのせいかもしれない、私はやっと気力を取り戻してだれもない家に帰って行った。

私は、だれにも愛されていないけど・・・私はお父さんが・・・好きだもん。

お母さんが好きだもん、園子だって志保だって・・・そして・・・もちろん、私の男友達・・・

新一だって・・・

助けてよ・・・だれか・・・お父さんを助けてあげてよ・・・

私しかない…

私がやるしかない…

誰もわかってくれるはずがない…

だってだれにも愛されていないとわかってしまったのだから…

助けて・・・（後書き）

いやあー蘭の勘違い・・・！

蘭は誰にだって愛されているはずなのに、

高田さんの言葉に惑わされてしまったあ…！！！！

好きだから（前書き）

新一視点です。

蘭が心配になって、蘭を付けていると…？

好きだから

おれは今、蘭を尾行している。

え？なんでかって？

それは、昨日の放課後のことだ。蘭がそわそわして裏庭に向かって
いた。おれは不審に思い、蘭にばれぬよう、こっそり尾行して草む
らに隠れた。

草むらの中に入ると驚くことに園子も宮野もいたのだ。

理由は蘭が気になってここで隠れて話を聞いているという。

おれも気になっていたので二人の話を聞いていた。

「お金。」

はあ？

「お金をちょうだい」

お金を要求してるし…ま、蘭がそんなに招致するわけないか。

「あ、そう、お父さんがどうなってもいいわけね。」

え…？

「監禁してあるのよ。」

監禁！？蘭のお父さんを？

「わかった…そしたら…お父さんは…」

「もちろんはなしてあげるわ。」

「わかった…」

高田はそういうところからいなくなった。蘭は脅されている。

蘭は心が優しいから誰かのためにどんなに自分が傷ついても助けよ
うとする。

蘭が苦しんでほしくない。

おれが蘭を守る。

蘭はこの俺が守ってみせるよ。

カシャッ

園子が証拠写真を撮っている。

カシャッ

さっきからシャッター音が鳴り響いている。

やべえ、蘭がこっち見た！

気付かれたかな…？

新—
…

え
…
?
今
の
…

お父さんを…助けてよ…

助けて…助けてよ…

蘭…？

蘭の声が聞こえた。でも、口に出していないような…

新一…お父さんを助けて…

新一…どうしたらいいの…？

お父さん...お父さん...お父さん...っ！

助けて・・・新一
…

蘭の声がおれのからだの中で響いてくる。

どこから聞こえてくるのだろうか？

でも、これが蘭の本音だったら・・・？

蘭はおれに助けを求めている。

園子にも宮野にも。

新
—
い
い
い
…
!
!
!

蘭
…

お前を守るよ。

おれ、
今わかつた。

おれの好きな人は…

蘭、お前だよ。

そして、今に至るが…裏庭では蘭がたぶん一万円の入った茶封筒を高田に渡していた。

その様子をおれはきちんと写真に撮っていた。

カシャツカシャツ

よし、とれたな。蘭、もうちょっと耐えているよ？もうすぐ、おまえをらくにしたやるからな！

好きだから（後書き）

超間があいちやいましたね…
すみません！

この気持ちはいったい？（前書き）

蘭視点です！

この気持ちはいったい？

今日もまた、一万円の入っている茶封筒を持って、裏庭へと向かう。

いつになったらお父さんを助けてくれるのか、まったく予想のつかないままただだ、封筒を握りしめているだけだった。

お父さんのことが心配で、毎日お金を持っていくことに決めて一週間が過ぎている。

そして、それと同時に我が家の家のお金はだんだんと減っていくばかり。

さらには、新一と話すことも許されることはなかった。

「持ってきたよ…」

「あらありがとう。今日で七万か・・・明日からは三万持ってきたかい？」

「え…？」

無理に決まっている。ただでさえ、もう限界というのに×3なんてできるはずがない。

「無理…だよ…」

力なく言った言葉。説得力があるはずのない声。

「何？あなたのお父さんが死んでもいいわけ？」

「どうして…？」

「はあ？」

「どうしてそんなことするの…？お父さんじゃなくて私でもいいじゃない。」

「わからないの？あなたを苦しめているの。あなたが憎いのよ。工藤君のことを新一と呼び、仲良くして…腹立つのよ！！！」

怒鳴られても、私はそんな声届いてない。私の耳の中にあるのは、お父さんの声だけ。それと、あと一人。誰だろう？いつも私の子と見ていてくれているような…

お母さん？ううん。男に人の声。
誰…？

蘭っ！！

新一…？

新
—
な
の
ね
…

「ちよつと聞いているの！！！！！？？」

あ…聞こえなくなった。

「あ…ゴメ…」

バシッ！！

いた…

「あんたさあ、腹立つことばかりするのね…いいわ、五万持つてきなさい！明日には必ず持つてくるのよ！」

「そ、そんな…」

「何？あたしに文句ひとつあれば、どうぞ言つてよ。その代わり、あなたのお父さんを殺すことになる…」

「…わか…った…」

「いい子ね。じゃあね。」

高田さんはそれだけ言つと私のもとから去つて行つた。私の手には、一万円の入つていない茶封筒が残されていた。

私は何をしたらいいのかわからなくなった。

家に帰る勇氣もない。

お父さんもお母さんもない家に帰りたくない。

お父さん…私…どうしたらいいの？

新一…教えて…お父さんを助けていよ…

あれ？どうして新一が出てくるの？

新一は無関係じゃない。それに、園子だって…志保だって…

『よお蘭。』

声が聞こえてくる。

あなたの声が聞こえてくる。

気付かぬうちにあなたという存在がどんどん大きくなっていく…。

教えて・・・あなたは私のどういう存在なの？

友達？

『蘭』

あなたが私の名前を呼ぶたびに私の胸が高鳴っていく。

「蘭！」

ほらまた…私を呼んでいる…

呼んでいる????

「蘭！何してんだよ！！？」

本物だ…あれ？どうしてここに？
まさか見られた？

お金を渡しているところを！？

「あ、あの…」

「もうみんな帰っちゃったぞ？」

「え…？そ、そうなの？」

ばれてないみたい…よかった…

「新一こそ、どうしてここに？」

「な、なんだっていいだろ？」

「何でよお！？」

「ひ、秘密！」

「えゝ、ケチね！」

そんな会話は私はなんとなく心が温まった。
なんだか安心できるような気がして。

「ねえ新一…」

「んあ？」

「あ…いや何でもない。」

言えないよね…？いつたらみんなに迷惑かけちゃうもんね。

お父さんのことなんて相談できないもん。

「新一、ありがとう。」

ぼそつと言った言葉。

待っててくれてありがとう。

一緒にいてくれてありがとう。

そんな思いは届かなくても心の底で思ってる。
こんなに新一を意識してしまっている。
なぜだかわからない。

胸が高鳴ったり、安心したり。

嬉しかったり、ちょっぴり悲しかったり。

だからこそ、新一だからこそ、言える。お父さんのこと依頼しよう。
新一は探偵だもん。新一を私は信じてる…

「新一、私の悩み、相談してもいい？」

今新一に真実を話す。

もう後戻りはできない。

でも、どうして新一なんだろう？

どうしてこんなに胸が高鳴るんだろう？

どうして安心するんだろう？

もしかして、私は…新一のことが…？

だとしたら、なんとなくわかるような気がする。

そっか、私、新一が好きなんだね…

この気持ちはいったい？（後書き）

やっと本当の蘭の気持ちがかけました！

新一も気がついたよう！

2人は両想いになるか！？

三人の思い（前書き）

新一視点です！

園子と志保視点もあるかな？

三人の思い

俺は蘭を守ってやりたいと思ってる。

その思いが一層増したのが昨日の下戸途中で蘭の相談を聞いたこと。蘭は悲しい思いをしていた。だから、俺は蘭が傷ついた心をいやしてやりたいと思った。

蘭を守ってやりたい…。

「新一、昨日はありがとう！」

いつの間にかいた彼女の笑顔は天使そのものだった。

ここ最近蘭の笑顔を見ていない。だからもっと輝いているように見えた。

「俺のほうこそサンキューな」

俺の言葉に蘭は？を浮かべていたが本当に蘭には感謝している。蘭の笑顔を見れたのだから。

私の名前は鈴木園子！蘭の親友となりましたあ！

蘭っいたらここ最近笑顔を見せてくれない…

私のことが嫌いになっただかな…？

でも、一週間ぐらい前に蘭が高田さんにお金を要求されていた。

蘭が…可哀そうだよ…！

蘭がかわいそうだよ…！！！！

蘭だけは守ってやりたいよ…

蘭のあの笑顔が見たい。

素敵なのあの笑顔が見たい！

わがままだけど、蘭のためにだってなる。だから…だから…蘭、あ
なたが幸せになれば、私も幸せだよ！

「園子お！」

笑顔の蘭。でも、それが満面の笑顔をととは思えないよ…

蘭の笑顔はもっともっと素敵で太陽のような笑顔だと思う。

蘭は天使のように笑うと思う。

私は高田さんを許さない！

蘭の笑顔を奪い取ったあの高田さんだけは許せない！

そして、新一君にべったりする高田さんが!!

新一君と蘭は結ばれる運命!

それなのに、あの女は邪魔ばかり!最低女街道ダントツ独走まっしぐらよ!!!

私の名前は宮野志保。

今は、蘭さんのことを蘭と呼んでいるけど……そういえば最近蘭の笑顔を見ていないわ。

蘭は優しい心の持ち主である。

天使のような心を持っている。

「志保!」

「志保ってクールだね!」

「志保、かつこいいよ!」

「志保ってばあ!」

蘭はいつでも笑顔だった。なのに高田さんのせいでなくなっていた。

そして、しゃべらなくなった。

「蘭、最近どうか・・・」

「・・・」

「蘭?」

私とも、園子とも、工藤君とも。

蘭、Rotten Appleに占領されちゃだめからね。

あなたは本物の、Golden Appleなんだから。

「志保お!」

蘭が話している。言葉を出している。

それだけでもうれしい。

蘭の笑顔が見たい。

蘭の天使の顔が見たい。

蘭。あなたは本物のAngelだから。自信を持ちなさい。

まあ、この私が言えることではないんだけどね。

三人の思い（後書き）

蘭を守りたいという気持ちを書きたかったです！

三人の気持ちはみんな一緒ですからあ！

蘭、幸せ者ですよねえ！

志保の活躍！？（前書き）

三人の作戦会議中の様子です！

志保の活躍！？

今、女子二人、男子一人という微妙な数で大きな洋館のリビング
作戦快井が行われた。

たった三人の作戦会議だが、内容はすごく慎重な…？でも、三人に
とっては大切な会議である。

三人の名前は、

女子は鈴木園子と宮野志保。男子は工藤新一。

そして、内容は毛利蘭と高田佐恵のことだった。

蘭は佐恵にゆすられている。

お金を奪っている。

そして、蘭のお父さん、毛利小五郎を監禁している。

「なあ、俺と園子が蘭のお父さんを助けるから、宮野、お前は蘭の
ほうをよろしく頼むぞ！」

「ええ、いいけど、どうやって侵入すんのよ。」

園子の質問に新一はニヤツと笑った。

「いい質問だ！じつは、宮野に頼んで設計図を作ってもらったんだ
！宮野はそういうの得意だからな！まず、ずっと前に高田の家に郵便
屋を悟って侵入し、透明な子の防犯カメラを設置して、設計図を
作ったつーことだ！」

新一は志保の発明品の透明になる防犯カメラを見せながら説明した。
園子はなるほどと感心していた。志保は少しあきれながらも新一の
説明を聞いていた。

「それで、工藤君。高田さんは私が好きなように攻めちゃっていい
わけ？」

「まあ、時間稼ぎみたいなこととしてくれよ。後は適当に。」

「あら、そうなの。なら、いいわね。」

「何がだよ」

「私のやり方でやっていくわ。あ、もちろん作戦通りにやるから心

配しないで。」

志保はそういうと工藤邸を出て行った。その後、新一は佐恵の家に侵入した。

園子は連絡係としている。

一方志保は蘭が佐恵にお金を渡しているところを見ていた。

蘭は茶封筒をしっかりと握りしめていた。

「あ、あの…」

「何？なんか文句ある？」

「あるわよ！」

「なんですって！？」

「わ、私じゃないよ・・・」

「そうよ、蘭じゃないわ。」

「だ、誰よ！？」

「ほら、あなたの後ろにいるじゃない」

佐恵は振り返るとそこには志保が立っていた。

「美、見たわね！」

「ええ、ばつちり見てたわ。」

「なによ！あなた、いい気になって！」

「いい気？誰が？」

「あんたよ！」

「私？」

「そうよ！」

「それは違うわ。いい気になっているのはあなたでしょ？Rotten Appleさん？」

「な、何よ…？そのラットウン…？」

「Rotten Appleよ。腐った林檎っていうの。」

「な、なんですって！？私はきれいな美しい林檎よ！腐った林檎は毛利さんじゃない！」

「あなた、何もわかってないのね。」

志保は不敵な笑みを漏らし始める。

「蘭こそがGolden Apple。そして、あなたが、Rotten Appleよ。」

「そ、そんなこと…！」

「あら、あなたは悪魔。蘭は天使。どう？わかったかしら？高田さん？」

志保はだんだんとハードな言動を始める。

蘭は何をしたらいいのか分からずただその場に立ちすくんでいた。

止めるべきか、止めないべきか？

そんな迷いと志保の冷静さに驚きを感じていた。

志保の活躍！？（後書き）

今日はここまでです！

次回、この続きをしたいと思っています！

素直な気持ち（前書き）

この前の小説の続きです！
志保の攻撃に佐恵はいかに！？

蘭視点です！

素直な気持ち

「あら、あなたは悪魔。蘭は天使。どう？わかったかしら？高田さん？」

志保の言葉はまるで勇敢な英雄のようにあらわしていたような気がする。

志保はいつでも冷静沈着でどんな時でも素顔を見せない。

でもね、志保の素顔は私と園子、新一は知っている。

優しくて強くてそして、粘り強い。

でも、クールでかっこいいの。

志保は私の憧れ。

私なんか、特別きれいでもかわいくも優しくもない。

志保は美人である。

そして、新が強く、私は志保が大好き。

「わ、私が…悪魔!？」

志保は私たちの知らないような言葉を知っている。

ほら、頭のいい高田さんだって知らないの。

「Rotten Apple、Devil、それがあなたなのよ。わかる？頭のいい高田さん？」

志保の攻撃に高田さんは何も言えなくなっていく。

最初は口答えしていたのにだんだんと辺りも静かになっていく。

私は二人の間にいるけど、どうしたらいいのか分からなくなっていく。

そりゃ、止めたほうが言いに決まっている。

でも、止めたところで二人はもつと言い争いになるはず。

どっちにしろ、言い争いになるんだ。

私はそう決心し、止める行動へと移った。

「あ、あのさ！もういいから!!!」

「え…?」

「・・・」

志保は驚いたような顔をして高田さんはうつむいて何も言わない。
ただ私だけ必死になっていた。

「もう…いいの！高田さんが…これ以上言うとかわいそう！お願い
志保！これでいいの！私はこれで十分だから！！おねがい・・・！
もうやめてちょ・・・」

「駄目よ！！！」

「え…？」

私の言葉をさえぎった志保の大きな声。

私にはどうしてだか分らなかった。

「あなた、それで許す気なの！？こんなにお金を取られているって
いうのに！？私たちが作戦を練っていた意味がないじゃない！！」
志保の言うとおりだ。

私のためにやってきたというのにどうして私はこんなことを言っ
てしまったのだろうか？

その時、高田さんが口を開いた。

「あなたは、優しいすぎなのよ！もうちょっと悪に…」

「悪…」

「そうよ！あなたの心はきれいな…！」

「私の心が…きれい…？」

「そうよ！だから悪になってみなさいよ！」

「悪に…？」

「駄目よ蘭さん！その言葉に乗せられてはいけないわ！」

志保の言葉も高田さんの言葉も同時に入ってくる。

頭がだんだんと痛くなっていく。

私は…何がしたいの…？

高田さんに謝ってほしいの？

うつん、違う。もっと…

蘭、R o t t e n A p p l e に占領されないでね！

もうちょっと悪になりなさい！

悪…

そんなのいけない。

悪は…正義じゃない。

刑事のお父さんも桜の大門に誓って刑事という仕事をしてきたんだ。

桜の大門は正義を表す言葉。

だから、私は桜の大門になりたい。

悪は決していけない。

私は私。

高田さんは高田さん。

みんなはみんな。

そう、自分は自分なんだから、正義でも悪でも関係ない。

でも、私が思うに正義は一番大切なことだと思う。

だからこそ、私は闘うんだ。

「悪になるとか正義になるだとかは・・・」

私が決めることでしょ？

高田さん、悪いけど、悪にはなれない。

悪はいけないよ。桜の大門に誓って私は悪は許さない。

カツコつけてるつもりじゃないよ？でも、私の本当の気持ち。

お金とかの問題じゃない。

お父さんを監禁するのはいけないこと。

あと、ありがとう高田さん。」

「何言ってるのよ……」

「高田さんがいたからこうやって自分の本当の気持ちに気づけた。ありがとう！高田さん！」

私はそういうと静香に高田さんを抱いた。

彼女の体は暖かった。前の高田さんとは違う、温かい心を持っていると思う。

「ごめんな……さい……」

泣きながら謝る高田さんはきっと素直な気持ちだったんだと思い。私はこのとき思った。

自分の素直さはだれにも負けなくらい強い思いなんだ、だからこそ、人間は素直で生きていかなくは相手に伝えられないんだって。

志保はそんな様子に暖かい笑顔を私に向けてくれた。

私も久しぶりに満面な笑顔を見せることができた。

「ねえ高田さん。私、高田さんと仲良くしたい。」

「いい…の？」

「ええ！もちろんよ！」

「ありがとう…！あと、お金、返すわ。それと、あなたのお父さんを今返してあげる。」

「ああ、それなら平気よ。もう工藤君たちが救出しているわよ。」

「そう…よかった…」

高田さんの安心の笑顔は私にとって最初の笑顔に見えた。

あんな風に笑えた高田さんを見たの初めてだった。

「高田さん、ううん、佐恵。これからもよろしくね。」

「蘭…ありがとう…！」

佐恵は泣いていた。それと同時に私も泣いた。

彼女は本当は天使のような心を持っているのだ。

素直なきれいな心を持っているのだ。

私も素直な気持ちになって新一に思いを伝えようと思っている。
好きという気持ちを。

素直な気持ち（後書き）

佐恵ちゃんイイ子です！
蘭優しいですねえ！

再会そして・・・（前書き）

蘭と小五郎の再開、喜びのシーンと…？
新一と蘭視点があるかな？

再会そして・・・

今、俺と蘭は米花公園へと向かっていた。蘭は緊張しているのかうれしいのかわからな表情だったが、俺は何となく心がくすぐったかった。

米花公園に入ると小さな子どもたちが帰っていったようなもの静かな雰囲気だった。

蘭は俺に公園から出てくれるかな？と言われ、俺は二人の会話が聞こえるか聞こえないかわからないぐらい遠いところにいた。そこまで遠くはないが、2人の会話を聞いてみたいという気持ちが少しあったのだ。

「お父さん…久しぶり。」

「久しぶりだな、蘭。」

「お母さん、泣いてたよ？」

「英理がか・・・あいつには心配掛けちゃったな・・・」

「お母さんだけじゃない！私も！お父さんのことが心配で心配で・・・」

「！」

「そうか・・・そうか・・・すまん。本当に悪かった。」

蘭は今にも泣きそうな顔をしておっちゃんを見ていた。

「ねえお父さん。お父さんは、お母さんこと、どう思ってる？」

「・・・」

「答えて。私は二人が元の二人に戻ってほしいと思う！」

「・・・蘭、俺は・・・」

「お父さん・・・」

「俺は英理を愛してる。」

お・・・いいこと言うじゃん。

「お父さん・・・！」

蘭が期待のこもった声を出す。

なんとなくおれもうれしかった。

「ああ、お前の言う通り。蘭に会う前にもうよりを戻したさ。」

「お父さん…っ！ありがとうっ…！ありがとうっ！」

蘭は我慢していた涙をその場でたくさんたくさん流していた。

きれいなしずくのような涙は彼女の言いたいことが詰まっていると思う。

蘭は、ずっと待っていたんだ。両親仲良く暮らしていける日を。

「ねえお父さん。私…好きな人がいるの。」

「ほへ？」

いきなりのことにおっちゃんはまぬけな声を出す。

つていうかそんなことよりも蘭に好きな人お！？

蘭に好きな人がいたのか。

誰だ？

いつたい誰だよ…。

「誰だよ。」

「私、今日その人に告白しようと思う。」

「そうか…まあお前が選んだ人なら誰だっていいぞ。さあ、蘭

！いつてこい。」

「うん！ごめんね、お父さん！」

「なんで謝るんだよ。」

「だって、お父さんの所から離れちゃうのってさみしいっていう顔してるもん！」

蘭は満面な笑顔をおっちゃんに向けている。

俺はそんな彼女に目を奪われてしまう。

自分でもわかつているはずなのに…。

そうして、蘭とおっちゃんは分かれて行った。

今私はある人を校門の横で待っている。丁度、電柱があるのでそこに寄りかかっていた。

そのある人とは、サッカーがうまくてクールに見せて本当はがきっぽくて優しくて、探偵で。

私は彼しか好きになれなかった。

きつと出会ったときから好きになっていたんだと思う。

あ、きた・・・

「あ、あのさ、ちょっとこっちきて！」

「あ、ああ・・・」

半ば無理やり腕を引っ張ってきた。

引っ張って行った先は佐恵によくお金を渡していた場所、裏庭だった。裏庭には銀杏が落ちている途中だった。もう冬になるこの季節。もうすぐ雪が降るのではないか？そんな心配よりも私は目の前にいる彼に集中していた。

険しい顔をしているかもしれない。

でも、思いは伝えなくては…

こぶしに力をいれて口を開いた。

「あのさ、急に連れ出してごめんね。」

こ、これしか言えない…

まあ、最初はこんな形で…

つて、早く本題に切り出さないと！

「わ、私」「お、俺」

あ、重なった。

「あ、ごめん。そっちからでいいよ。」

「あ、いや・・・俺さ、お前のことが好きだよ…」

え…新一も私のこと…？

そう、私が告白する人物。それは商店街でたまたま出会った工藤新一であつた。

「……………」

「お前は…？」

「私…」

私も好きと言いたい。

でも、口が動かない…どうしよう、早く言わなきゃ…

「やっぱ駄目だよな…」

ち、違う…！私はあなたのことが好き！ううん！大好き！

「ちが…う！私…もあなたのことが好き…！」

やっと言えた言葉。

なんかすっきりした。

笑顔で言えただろうか？

ちゃんとはつきり言えただろうか？

そんな疑問よりも新一は私の唇を自分の唇に重ね合わせた。

私はいきなりのことと驚きの感情しか出てこなかった。

そして、静かに私の眼から涙がこぼれた。

嬉しかったんだな…
ありがとう…新一…

でも、佐恵はいいのだろうか？

佐恵は恋をあきらめていいのだろうか？

できれば新一に告白してほしい。

なぜなら、恋は実るか実らないかのわからない花。それなら、一回試してみればいい。

そして、また新たな花をさ化させるように頑張るのだ。それが、恋の花というもの。

新一が佐恵のほうを選ぶことは絶対いや。

でも、佐恵にはちゃんと思いを打ち明けたほうが佐恵が楽になるはず。

私も佐恵のサポートはしてやりたい。

もし、佐恵を新一が選んだとしたら私はそれでいいと思う。

好きな人が幸せになることは私の幸せにだってなる。

佐恵、あきらめちゃだめだよ？

ちゃんと恋の花を实らせるか実らないかの区別がつくまであきらめてはいけないよ？

そうしたら、きっとあなたにもいい恋に出会えるはずだよ？

再会そして・・・（後書き）

蘭は誰にだって優しいんです！

告白そして、出会い（前書き）

佐恵の告白シーン！

佐恵ちゃんが新一に気持ちを伝えます！どう伝えるのかあ？
そして・・・

告白そして、出会い

私は今、裏庭で工藤君を待っているの。私の初恋の人だった。でも、蘭をさんざん苦しめたのがこの私。

悪人の私。

それでも蘭は私を優しく許してくれた。

それどころか、蘭は友達になろうと言ってきた。

蘭は天使のような心を持っていた。

蘭のお父さんを監禁し、蘭からお金を奪い取ってさんざん蘭を苦しめた・・・。

お金はちゃんと返した。お父さんも返した。

それでも私は納得いくことはできない。

こんなに蘭を苦しめたというのに、これだけでいいと言っていた。

私は悪魔。蘭は天使。

そう、私と蘭は全く違う世界に住んでいるような気分ね。

「まだかな・・・」

「佐恵！」

「蘭！？」

蘭だ...どうして？もう帰ったはずじゃあ...

「佐恵、新一が今くるよ！」

そう、蘭が提案したのだ。工藤君に告白しなよって。まさか、私に赤っ恥を...？ひ、ひどいわ！

あ、でも待つて。蘭に聞いてみるのがいいと思う...

「ねえ蘭。どうして工藤君に？」

「佐恵には我慢してほしくない。佐恵にはちゃんと思いを伝えてほしい。振られないようにしてね！」

「・・・蘭、悪いけど、無理だよ。」

「え...？」

「だって、工藤君に振られるにきまつてる。」

「ばかね！そうやって思ってたら振られるにきまつてるじゃない！自信を持ってね！じゃ、私園子と帰・・・」

「駄目！！蘭は、工藤君と帰りなさい！蘭は工藤君と付き合ってるんでしょ？だったら、仲良く帰って・・・」

「佐恵…わかった。なら、待ってるね。」

「ええ！」

私はそういうと工藤君を見つけて、裏庭にて、告白という勇気を出そうと思っていた。

「ねえ…工藤君…っ」

「んだ？」

冷たい声。きつとまだ蘭のこと引きずっているのね。

「私、工藤君のことが好きなの。」

「そう。」

「付き合ってくれる？」

「いやだね。俺は蘭と付き合っている。そして、お前が一番嫌いだよ。じゃあな。」

「あ、待って！なら…蘭をちゃんと幸せにしなさいよ！！！！そうしなかったら…蘭は私が貰うんだから！！！！」

私はそういうとその場を去って行った。

その時、工藤君が鼻で笑ったような気がした。

ちよっとその様子がうれしかったりもする。

でも、涙が今になってあふれだしてくる。

わかりきっていても、本当のことと言われると、すごくつらいことがよくわかった。

蘭みたいになりたい。

でも、それよりも素直になりたいという気持ちでいっぱいになっていた。

「危ない！！！！」

「え…？」

いきなり男の人の声に驚いて振り返ったとたん、その男の人が私の体を抱き、道路の端っこに移動させられた。

「な…何…？」

「大丈夫か？」

「あ、うん…」

私は何があつたのか分からず、差しのべられた手の上に自分の手を乗せた。

これが運命の出会いとは知らずにわたしはたちあがった。

告白そして、出会い（後書き）

佐恵の運命の出会いの瞬間！？

最後は佐恵もハッピーエンドになる予定です！

冬へと向かう時（前書き）

佐恵ちゃんに出会った男の正体は…！？

冬へと向かう時

昨日の男子はいつたい誰なんだろう？

昨日、私は車にはねられそうになった。

私は最初何があったのか分からず、私の身は名前の知らない男子に助けられた。

とても、とても感謝している。

もし、彼に助けられなかったら、私はもうこの世にはいなかったか、病院で意識不明の状態であっただろう。

彼にお礼を言いたい。

それだけ私は思っていた。

次の日――

元気よく（？）学校に向かっている私。学校の通学方法はリムジン

に乗っていく。

私のイケメン執事がお迎えする毎日。

そういえば、助けてくれた男子もイケメンだったような…

ま、いつか！

「いつてらっしゃいませ。」

「行ってきますわ。」

あーあ、イケメンだからってここまでお迎えしなくてもいいのに…
そういえば…

助けてくれた人もイケメンだったような…？ま、いつか。

「おはよう、佐恵！」

「おはよう蘭！あのね、昨日車にひかれそうになったんだけど、間一髪、男子に助けてもらったのよ！名前も何も知らないんだけど、イケメンだったの！あ、でも、好意は持ってないわよ？」

「へーえ！」

何々？うたがってるわけ？

「佐恵も運命の出会いってやつが来たのねえ〜！！」
わあっ！そ、園子じゃん！

「な、なによお！」

「佐恵、その男子きつとイケメンでしょ！？」

「え！？どうしてわかったの！？」

「わかるわよ、あんたの顔見ればね！」

「そうそう！」

2人は私を茶化しているような感じだったけど、こうやって仲良くしていることがうれしかった。

ちなみに、園子は蘭が説得するまで二時間はかかったという。

「新ー！おはよ！」

ズキッ

まだ傷が治っていない。

だって、昨日振られたばかりなのに、会えるなんていやだ・・

「おつす、蘭。」

「おはよう、新一君」

「おつす」

「おはよ．．．工藤君．．．」

「おつす。」

よかった．．。

普通だ．．

「蘭はさあ、工藤君とどうなったわけえ？」

思い切つて聞いてみた。

蘭はちよつと顔を赤めてきた。

「ま、まさかあ、キスまでいつちやたんじゃないでしょうねえ？」

「ななななな、な、な、な、なんでえ！！！！？」

「お、図星ですなあ、奥さくん！」

園子まで参戦！？

ま、そのほうが楽しいけどね！

「お嬢様～～！！」

げえっ！執事の山本！！

「な、なによ！」

「何という乱暴なお言葉．．．！とにかく、お弁当をお持ちになさつてください。」

山本は私にお弁当を手渡すとすぐさまその場にいらなくなった。

というより、私が追っ払ったといつていい感じ。

「へえ～！佐恵ってやつはお金持ちなんだね～！」

蘭がうらやましそうに言う。

そんなにうらやましいとは思えない。

なんか一つ一つの言葉が決められていて、堅苦しいわ。

「ま、まあね．．でも、そんなに面白くないわよ？」

「そうなんだあ～」

納得するんかい！？

そんな突っ込みを入れながらも私は蘭と園子、工藤君とともに教室に向かった。

その時だった。

「大丈夫やったか？」

どこかで聞いたことのような声が後ろから聞こえてきた。

私は何があつたのか分からず、なんとなく振り向いた。

でも、誰もいるわけもなく、ただ、日差しのかかっている明るい廊下が私を照らしていた。

「気のせいか・・・」

そうつぶやいた。

「おい！佐恵！早く行こうよ！」

「あ、うん！！」

私は蘭に呼ばれて、急いで教室に入って行った。

ワイワイ騒いでいる中でも、先生の大声によって静かになり、授業が始まった。

私は別に蘭みたいに真剣にやっている気はなく、ケータイで他中の友達にメールを打っていた。

「・・・え」

『また、会おうぜえ（笑）ていうかあ』

「・・・え」

『まだ好きなの？あんなやさ男お』

「・・・え！」

『あきらめたほうがいいって・・・』

「・・・え！・・・え！！・・・え！！！！！！！！」

「ほへ？」

ついついまぬけな声が出てしまった。

「Hi！佐恵さん！この意味分かりますかあ！？」

だされたもんだいはこう、

「x」

はあ？x？何よ…それ！

「xって何…？」

「佐恵、それは…」

キーンコーンカーンコーン！！

あ…なつた…

「それでーは！佐恵さん！この意味考えてきてねー！」

先生はそれだけ言々と教室から出て行った。

私は何が何だか分からなくなってきた。

「おーい、みんな！ぶっきらぼうだけど、今から転校生を紹介するぞ！名前は田中勇治だ！」

先生はある男子をみんなに紹介している。

その紹介された男子を見て私はシャーペンをその場に落としてしまった。

整った顔立ち

きれいな茶髪の髪の毛

背が高くてハンサム

それよりも、間違いなく彼である。
私の命の恩人！

「あ、あ、あ…」

「あ」しかいえないよお！

「よお！またおうたな」

えええ！なんでおぼえてるの！？
ていうか、いわなきゃ！

「あ、ありがとう！昨日は本当に助かったわ！」

笑顔で言うとは彼はちよっぴり顔を赤くして
頬をかきまくっていた。

その時、彼は思いがけない言葉を私に言った。

「お、おれ！あんたのことが好きや！付きおうてください！」

冬へと向かう時（後書き）

いきなりの告白〜!?

いったい何をどう考えれば告白というのに移るかは、次回お楽しみください！

田中 勇治（前書き）

関西弁の少年、勇治はいきなりの佐恵に告白。
さて、そんな勇治に佐恵は…？
佐恵視点です！

田中 勇治

『付きおってください!』

いきなり言われた告白。

私だって告白された経験はある。
でも…

こんなにいきなり言われるとなると、やっぱりへん。

しかも

みんなの前……

いや、恥ずかしすぎでしょ?

「あ、あの…いきなり何…?」

「な、何回言わせる気じゃ!」

「じゃあなんなのよ!いきなり告白とかあり得ないでしょ!」

「なんでや!ええやんか。好きゆつてるんやで?」

「そうじゃなくて!あなた、私の何を知っているってわけ?!」

「あんたの顔にも、性格にも惚れたわ。」

「だーかーらー!何を知ってるのよ!」

「あんたの性格何でもしってんで?」

うそ…まじで…?

「ねえ…どうして!？」

「ああ、俺とあんたおんなじ保育園やで？」

「はあ?でも、大阪弁の人なんて…」

「チャウチャウ!ちがうクラスや!せやから、あんたは俺のことしらへんけど、俺はあんたのことがずっと好きやったからな!」

どうして彼はすべてがわかるの…?

わたし・・・彼が…

好きなわけない!!

「おーし！これでリハーサル終わりや！！」

「え……？」

「あゝ、すまへんな！これ、リハーサルやで？」

「じゃあ、昨日助けたのは……？」

「そら、たまたまやで？」

「はあ？ふざけないでよ……！」

田中 勇治（後書き）

いやゝ・・・きょうはここまで！
だましたのか、勇治君！！

本音（前書き）

昨日、時間がなかったため、途中で終わりました・・・。
申し訳ないです…
と、いうわけで、続きを！
佐恵視点です！

本音

リハーサル…？

何よ…それ。

私をだましたわけ？本気にしちゃったじゃない…。
あなたみたいなイケメンに告白されたなんて驚きだったのに…
本音いっちゃうとうれしかったのに…

なのに…なのになのに！

何なのよあいつはああああ！！！！

この私をだましたですって！？

ふざけんじゃないわよお！！

私のプライドに傷つく、そんなことよりも悔しかった…
悔しすぎて…悔しすぎて…

本気にした私がばかだった…。

「そ、それで……だれなのよ、本音は……。」

「ああ、それか？　そう、あいつや！」

指さされたほうは……

蘭だっ
た…。

「はあ！？」

いきなり大声を出してしまった私。

それよりも、今付き合っているというのに、可哀そうな男。

「なんやねん、いきなり大声出しおって…」

「何って、彼女には…」

『恋人がいる』

という言葉を読み込んだ私。

何故なら…

私をだましから！

あんなに最低なことをしておいて教えられるものですか！！

十分工藤君の罰を受けなさい！！

「彼女は…なんや？」

「あ、いや別に…！彼女は美人だから？結構難しいわよ？だって、結構もてるんだから！女の私でも惚れたのよ？あ、でも、彼女、空

手やってるのよ。」

「ほ……空手をなあ……ええやんか！かつこええなあ！」

うそぉ……

普通ここであきらめる人多いのはこの人タダものじゃないわ！！

トととにかく、彼をあきらめさせないと！

「あ、そうそう、蘭は好きな人いるって聞いたよ！」

「そらきつと俺やで？」

あほかこいつは……！

「でも、彼女……」

「ええい！じゃあかしいんじゃボケ……！」

びくっ！

何よ……いきなり大声出して……ていうか、忠告してあげているっていうのに……！

「あ、田中…君よね？」

急に蘭が私たちのところにやってきた。どうやら工藤君は事件でいないみたい…

「ああ、せやけど…」

うつわあ…

顔真っ赤っか！

わかるよ…。わかってしまうよ…そんなに蘭が好きってことが…。

なんか悔しいなあ…

いつも蘭に取られてばかりかし。

工藤君だって、

田中君だって…

何よ、また嫉妬してるわけ？まったく、私って嫉妬深いな…

ていうか…早く工藤君帰ってきなさいよ！

「佐恵！」

蘭が私を呼んでいる。

私は蘭を呼びたいな。

そうだ、呼べばいいではないか。

彼女の右に立ちたい。

彼女を超えたい。

越えられないかもしれないけど、

NO、2までになりたい。

「蘭！今行くよ！」

そう、蘭みたいになればいいではないか・・・！

「ちよいまち、あんた佐恵っちゅうか？」

いきなり呼びとめられた私。もう、気分が台無しじゃない！

「そう・・・だけど？」

「苗字は？」

「何で言わなきゃいけないわけ？」

「ならええわ。あんたのこと、佐恵ってゆうわ。」

「はあ！？いきなり呼び捨てなわけ！？」

「ええやんか。俺は別にええけど…あんたは？」

「・・・わかったわよ…」

なんか嬉しいような…哀しいような…

本音（後書き）

佐恵視点が続きますねえ…

これからは佐恵がメインになっていくと思います。

しかし、ちゃんと新蘭を入れたいと思っていますので、読み続けてくれればありがたいです…！

気持ちを明らかに…？（前書き）

また佐恵視点かあ…

という方、すみません！！

気持ちを明らかに…？

勇治の攻撃は容赦なかった。

蘭が男友達に話している時、無理矢理割り込んでくるのだ。これでは嫌われるにきまっている。

しかも、超天然ならんなら迷惑と言っていいたいだろう。

そして、この日がやってきた。

蘭の最愛の彼氏、工藤君が登校してきたのである。

蘭と工藤君は相変わらず楽しそうにラブラブそう投稿してきた。その様子を見た勇治。

おやおや…顔が真っ赤ですぜ？

あ、でもこれは、嫉妬の真っ赤よ？
つまり、勇治は思い切り工藤君に嫉妬しているのです！

いい気味ね！

『なんか・・・可哀そう・・・』

誰…？今の…いや私か…

でも…私…かわいそうって…？

『あきらめたほうがいい…！あなたのためなのよ？』

まただ…やっぱり私の本音なわけ？
でも、こんなに私は…勇治のこと思ってたっけ？

「佐恵？どうかしたの？」

はっと我に返った私はあたりを見回した。

どうやらもう放課後へと時間は運んで行ってしまったらしい。

ずっと放心状態の私。教室の中にいるのは工藤君と蘭・・・そして・・・
勇治。

「何であんたもいるの？」

少しきつめな口調で私は勇治に言い放った。

「俺は蘭ちゃん待ってるんやで？」

「蘭だけはやめといたほうがいいわよ？」

「なんでや？」

「蘭を射止めることができるのは世界でたった一人。もちろん、あなたじゃないわ。」

この言葉を言っただのは私じゃない！

誰？

突然とあたしの声からミステリアスな声が聞こえてきた。

「志保ちゃん……」

そう、クールでミステリアスで有名な宮野志保ちゃん。
蘭の親友で私の友達でもある人。

「何やとゴラ！」

「あら、これは命令じゃないの。忠告よ、忠告。わかる？」

憎たらしい口調の志保ちゃん…。
ちよつと怖いかも…。

「ねえ、佐恵さん。蘭と工藤君を守ってあげなさいよ？もちろん、
私も園子も全力を挙げて守るけどね…」

「わかってるよ！」

志保ちゃんは案外優しい。でも…

蘭のこととなると般若のように恐ろしくなるのだ…！

「ええか？蘭ちゃんと俺は結ばれる関係やぞ？」

「あなたは蘭の何を知っているのよ…。」

「俺はな、蘭ちゃんと同じ幼稚園やったんや。」

「でもあなた、関西弁じゃない。」

「関西の幼稚園からこっちにきたんや。そして、一瞬にして一目ぼれやった。」

あんなに優しゅうてあんなにかわいい女はおらへんで?」

「そう…なら、あなたは彼女しか見ていないわけね。」

「せやで」

志保ちゃんはその後「完全なバカね」と言い残しその場を去った。

勇治は完全に怒りまくっていた。

まあ、それもそうだろうね…

「おい、工藤!」

勇治がいきなり工藤君の胸ぐらをつかんだ。

私は小さく悲鳴を上げる。

「新一!」

蘭が叫ぶような声をあげて勇治を引っ張った。離してほしいからであろつ。

「工藤!おまえ、ええ加減にせーよ!」

勇治は志保ちゃんの言葉でスイッチが入ったのか、完全に切れていた。

工藤君は何のことやらさっぱりで分からずじまいだった。

「やめて田中君!」

蘭は一生懸命抑えようとしているが勇治はやめようとしなない。そればかりか、蘭を抱き寄せようとしているのだ。

「勇治やめてよ!蘭は工藤君のものなんだから!」

「なんやとお!?!」

「そんなんで蘭が振り向くと思ったの!!?」

私の言葉に勇気の力は一瞬にして亡くなったのか、工藤君を離れた。工藤君は離されるとすぐに蘭のほうへ駆けつけ、「大丈夫か?」と声をかけた。

「新一こそ大丈夫!? 苦しくなかった!？」

蘭は本当に心から心配していた。しかも、瞳をウルウルさせていた。そんな顔も可愛かったりする。

一方勇治は蘭にその場で告白をした。

当然のごとく、蘭は勇治を振った。まあ、当たり前であろう。

「勇治、ごめんね。」

私はなぜか謝っていた。

勇治なんかには謝っていた。

「何でお前が謝るんねん。」

「だって私……」

「いつとくけど……お前のせいやないからな。佐恵……」

「勇治……?」

「あ、ほんならな!」

勇治はほんのり顔を赤くしながら帰って行った。
もしかして…もしかして…？

んなわけないか。

あの勇治があり得ないね。

でも…何か勇治と話していると心が温かい。

なんかすごくドキドキしてるし…

なによなによ！

何考えてるのよバカあ！

頭に出てくるの彼だけ。

田中勇治。ただ一人。

気持ちを明らかに…？（後書き）

佐恵は勇治君のことが好きなんですネ！

ふられた今・・・（前書き）

今日は勇治視点です！

いつもいつも佐恵視点じゃあきますもんね！

ふられた今・・・

昨日、俺は蘭ちゃんに告白した・・・。

でも、ふられてもーた。

なんとなくわかりきったはずやった。

佐恵に教えてもろたんや。

それで…思い切って告白してもーた。

でも、工藤が好きなんやと！

俺・・・佐恵の言葉に氣いつかんとなら、今頃工藤を絞め殺して、
刑務所イキやつたるーな・・・

佐恵にはほんま、感謝してるで…

なんでやろ。

俺の頭ん中であいつしかおらんわ。

何でやるな・・・

もしかして…俺・・・佐恵のことが…？

俺って何チユー男や。

ふられてすぐに好きな女を作りおったとは・・・

「なあ工藤。」

昨日の一件から工藤と俺は友達となっていた。さらに、蘭ちゃんとも友達になれた。

「なんだあ？」

「あんなあ、おれ、もしかしたら、佐恵のことが好きなんやと思うんや。」

「はあ！？昨日蘭にふられたばかりか！？何ですぐに好きな女が作れるんだよ！？」

「しらへんわ！でもなあ・・・なんか蘭ちゃんを本間に好きやったんかわからへんわ…。ただな・・・今まで以上になんかグツとくるよーな・・・？」

「へーへー。つまりお前は佐恵ちゃんのことを本気で好きなわけね。」

「お前がチャンづけとは…！」

「蘭がそう言えって言ったんだよ。」

「そ、そか・・・」

俺らはそんなこんなで話とると、蘭ちゃんが俺らんとこにやってきた。

蘭ちゃんとは俺らの話を聞くと興味津々で俺に語っておったけど・・・

・俺にはそんな話は耳には通ってはおらんかった。

それよりも、蘭ちゃんの前最初に言った言葉が俺の頭ん中をぐるぐる回つとる。

『勇治君は完全に佐恵のことが好きで好きで仕方がないんだね!』

本気で俺は…佐恵のことが好きなんか…？

ありうる・・・

いや、ありうるで…！

ほんまに、俺は佐恵のことが…好きなんや・・・！

俺、ほんまにあほやな・・・佐恵が俺のことなんか好きやないはず。

とにかく、明日、気持ち伝えるで！

ふられた今・・・（後書き）

明日、2人の恋が実るか！？

次回、最終回です！

最終回 告白

今、図書室で私は勇治を待っている。

勇治に呼び出されたのだ。

どうせ、お前のせいで蘭にふられたとでもいうんでしょう？
わかりきっているわよ。そんなこと。

「またせた！」

いきなりドアが開いたのでびっくり。

でも、なんだか嬉しかった。

「ねえ勇治。なんなのよ。」

「おれ、お前が好きや！おまえのおかげでおれはほんまのしあわせ
をおしえてもろたわ！」

「勇治……」

これ……これ……本当の告白というけていいの？

「私も…好き。」

「ほんまか!!!!?」

「うん…」

両想いって思えばいいのか…？
いいんだよね。

「勇治、
大好き！」

私はそういつと勇治と口づけを交わした。
勇治の唇は柔らかかった。
でも…大好き!!!!!!

蘭にはいろいろと悪いことをした。
新一君にだって。
でも、私は…
こうやって二人のおかげで幸せになれた。

ありがとう、蘭、新一君。
そして、園子、志保ちゃん！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1548y/>

春は別れの季節なら秋は出会いの季節

2011年11月21日09時44分発行